

第一章 「社会調査」という違和感

---

フィールドワークや社会調査に関する本書を出版した私にも、当然ながら「はじめての調査」の経験がある。本章は、フィールドワークや社会調査について右も左もわからなかった私の戸惑いから始まる。調査にはどのような服装をしていけば良いのだろうか。相手にどのように声をかければ良いのだろうか。悩みは尽きない。

本章では、私自身の社会調査の体験と経験をできる限り具体的に綴った。本章が、これから社会調査やフィールドワークに臨もう・挑もうとする方々への一助もしくは触媒となればと心から願っている。

---

## はじめに

社会調査を見つめ直す試みが日本社会学会によってなされた。二〇〇一年一月二四―二五日に一橋大学で開催された第七回日本社会学会大会にて行なわれた二つのシンポジウム「社会調査の困難をめぐって」・社会学の中の社会調査——その方法的反省——と「社会調査の困難をめぐって」・社会学の中の社会調査」である。私は勤務先での通常の業務があるために参加することはかなわず、きわめて残念なことに臨場感を味わうことができなかった。<sup>(2)</sup>しかし、ありがたいことに、その臨場感をも伝えるような特集が日本社会学会の学会誌である「社会学評論」で大々的に組まれた。<sup>(3)</sup>ここでは、当時のパネリストの方が自らの体験も交えながら、社会調査の限界と意義等に関して述べられていた。このような自己開示を伴った試みに意を強くして、私自身も社会調査に関して少し述べてみたい。私の場合は、修士課程の三年間の間に、社会調査についてまったく無知な段階から始まり、所属講座のメンバーとして数多くの社会調査という体験を経ることによって、所属講座の伝統的な社会調査に疑問を感じた。そして、フィールドワークに身を委ねながら、自らの修士論文を書くに至るといふプロセスをたどった。このようなきわめて個人的な記述であるが、現在におけるある種のフィールドワーク・ブームと言ってしまった方がいいのではないかという状況においては、「先にフィールドワークありき」といった感もなくはない記述も目にするところがある。私自身のプロセスを述べることによって、なぜフィールドワークなのか、なぜフィールドワークでなければいけないのかといった、フィールドワークについての記述の前提になるものが多少とも伝われば幸いに思い、本章を設けた。あまりにも個人的すぎるかもしれないが（単なる思い出話だと揶揄されるかもしれない）、私がフィールドワークに至るプロセスに少しだけお付き合いいただきたい。

## はじめての社会調査

臨床心理学講座出身の私は社会調査にはまったく無縁の存在であった。大学院を受験するにあたって、福武直や安田三郎による社会調査の教科書は勉強していた（福武一九五八、安田・原一九八二）。有賀喜左衛門（読み方に関しては、

中野一九八〇を参照)や鈴木栄太郎の実証研究もコトバとしては学んでいた。しかし、社会調査の体験がない私にとって、それはまさに「お勉強」でしかなかったように思う。日本国内でも伝統的な社会調査の系譜に連なる、有数の実証主義研究の調査グループでもあった講座に私は入学したが、社会調査に関する手解きを受けることはなかった。修士課程一年の秋に、初めての講座の社会調査の一端を担った。まさに「実践あるのみ、習うよりも慣れる」というわけであろう。私が学んだ講座は、入学時に在籍する教養部から学部に移行してきたばかりの大学二年生から博士課程の大学院生、そして教員までが一つのチームとして社会調査を行なっていた。北海道内の農村を中心に、この講座が社会調査をした後は「ベンベン草も生えない」と言われるほど、徹底的な聞き取り調査を行なった。この「ベンベン草」のフレーズはこの講座を表象するものとして、あるところでは揶揄され、あるところでは畏れられ、あるところでは敬意を表されて用いられていた。チーム全員が一致団結して、一人でも多くの地域住民の方々に、より詳しく、より深く聞き取りを行なうのである。私がこの講座を離れるまでの数年間の間にも大小取り混ぜて数多くの社会調査が行なわれていた。

私にとって記念すべき最初の社会調査は忘れられない。一九九一年九月一九日のことだった。「看護婦」(現在は看護師であるが当時はこのように呼ばれていた)に対する、「日本における専門女性の就労意識と生活実態」に関する調査であった。留学のために来日された大学院生の修士論文の資料となるためのものだった。質問がびっしりと書かれた調査票はすでに私に手渡されていた。その調査票自体も講座全員で目を通し、少しでもよりよいものにするように改良されていった。それは、いわゆる調査者に対する「インストラクション (Instruction)」の場である。当時在籍していた講座では、略して「インスト」と伝統的に呼ばれていた。「インストラクション」と言えば、心理学を学んだ／学ぶ者にとつては、実験やテストを始めるにあたって、実験参加者に対して方法などを指示する、いわゆる「教示」のことである。社会調査においても同じように、インストラクションがある。恐らく各研究機関や各講座、あるいは研究グループによって方法などは多様であろうが、基本的には調査を始めるにあたって、調査を実際に行なう人たちに対して「調査の主体と目的、調査の方法、注意事項などを徹底的に理解しておいてもらう」(江上一九九八、一二二頁)ために行なわれる

点においては一致していることだろう。<sup>(4)</sup> 所属講座には伝統的な調査票が存在していた。調査票を著書や報告書などに掲載する研究者や研究室があるが、私が所属していた講座の調査票は公表されることはなかったし、門外不出とも言えるほどであった。なぜなら、その調査票自体が当該講座の歴史を刻んだ、いわば「宝」なのである。これまでの社会調査で培われた知識とノウハウが詰め込まれているからである。誰もが一度は目にしたことがあるのが、「やつつけ仕事」で作成された気の抜けたようなアンケートや、きわめて杜撰な調査がある（詳しくは谷岡二〇〇〇など）。そのようなアンケートに無理矢理協力させられて、不愉快な感情を呼び起こされたり、戸惑ったりした体験をされた方もいるのではないだろうか。練られていないアンケートほど悲惨なものはない。調査票は一朝一夕では作成など出来ない。対象となる人たちとの長い真摯なやり取りとそのリフレクションから意味ある調査票がつくられていくのだと、少なくとも私は思う。だが、問題は、〈それを誰が用いるのか〉ということではないか。このことはまた後で詳しく述べたい。

修士課程一年でまったくの「社会調査素人」であった私は、講座の指示に従って、その約束の被調査者が待つ場所にかなり緊張しながら向かったことを覚えている。大学からは遠い場所であった。待ち合わせ場所に向かう前、スーツを着るべきなのか、ネクタイは結んでいくべきなのか、迷ったことも覚えている。アメリカ映画「恋に落ちて (Falling in Love)」（一九八四年）に登場するメルル・ストリーブが演じた女性性まではいかないが、何を着ていくべきなのか迷っていた。私の場合は、この映画のように少女のような恋心が服装を選ばせているわけではなく、「調査者として相応しい服装とは何か」という命題のもと深い悩みに陥っていたのだ<sup>(5)</sup>。いつ、いかなる場においても、誰にとっても「調査者」として相応しい服装があるわけではないというのが、いまの私の立場である。あえて言うならば、相手を不快にさせないような服装ということになるが、初対面でお会いすることになる方にとって何が不快にさせるのかを事前に察知することは非常に困難なことだ。赤いネクタイに激しい憎悪を感じるという方に以前お会いしたことがある。お会いしてお話をうかがうまでは、そのようなことを把握するのはきわめて難しいだろう<sup>(6)</sup>。そのときの私の場合、何を着ていくべきかの迷いはより具体的であった。相手の女性に迷惑をかけないためにはどのような服装が好ましいかということ

を考えていた。結局、スーツとネクタイは身につけず、水色の洗いざらしのシャツにページュのチノパン、それに紺の綿のジャケットを羽織っていくことにした。なぜ、私はスーツとネクタイを身につけなかったのか。大学院の先輩の話をもふと思いついたからだ。件の聞き取り調査の対象となっていた女性が当時勤務していた病院は他院からの引き抜きが少なくはなく、やや問題となっていたということだった。お昼下がりには、非番の「看護婦」の方と病院の外で一対一でお会いすることになるわけであるが、その際に私がスーツとネクタイ姿では引き抜きの交渉場面と第三者に誤解されてしまう危険性が高いのではないかと考えたからである。そのように見られた場合、被調査者の女性が職場で不利な立場になってしまうことを危惧していた。定職に就いた後に社会でほんの少しばかり揉まれた現在のまなざしから見つめ直すと、滑稽ですらあり、単なる独り善がりの妄想とも言えなくはない。さらに、私がスーツとネクタイ姿ではないことによって、その女性にとってはより困った誤解をされてしまう危険性がないとも言えないだろう。とにかく、当時の私は以上のような考えで、先のような服装で待ち合わせ場所に向かった。

調査当時（一九九一年）は現在のような小さな携帯電話などはまだ広く一般には流通していなかったために（正確にはPHSもまだ世に出回ってはいなかった）、初対面の人同士が待ち合わせをして会うということが、現在ほどあまり容易とは言えなかった（富田ほか一九九七など）。しかし、運がよいことに、調査に協力してくださる女性とは待ち合わせ場所ですぐ会うことができ、早速近くの喫茶店で聞き取り調査を行なった。その調査のテーマは前述のように「日本における専門女性の就労意識と生活実態」に関するものであったが、私にはその領域における専門的な知識など皆無であったし、社会調査の方法も知らなかった。ただひたすら調査票に書かれてある質問を行ない、相手が話した通りに書き写す。この作業に追われていた。大学院の先輩方からはだいたい一時間ほどで終わると言われていた。しかし、ひたすら調査票に書かれてある質問を行なう私であったが、まるでロボットのよう単調に行なうことができなかつた。目前の女性になんだか申し訳なかったのだ。調査に協力してくださった女性の気持ちも少しも楽になるようにと、時折冗談を言ったりもした。そして、調査票に書かれてある質問の中で自らが興味をひいたものに関して、さらに突っ

込んで尋ねたりもした。そして、わからないことばを何度も確認したり、なぜそのように答えるのか、その背景をさらに尋ねたりもした箇所もあった。そのときの私は、修士論文の資料の一端を担っているという使命感から必死であった。気がつけば、一時間ははるかに過ぎて、結局三時間半を過ぎていた。今から思えば、被調査者となってくださった「看護婦」の女性はよく付き合ってくくださったと思う。いまさらながら本当に申し訳ないと思う。「看護婦」と言えば激務である。せつかくの数少ない休日をも、素性のよくわからない大学院生の質問攻めで終わるなど、もし今の私が被調査者であれば耐えられない苦行であろう。その後、聞き取り調査で書いた文章をよりわかりやすいようにと、当時の22行ほどしか画面には映らないワードプロセッサでもう一度打ち直し、その場の雰囲気を感じながら、行間をより丁寧に詳しく埋めていった。当時、私が在籍していた講座の調査においては、小型カセットテープレコーダーで録音すること、ということもほとんどなされてはいなかった。すべて調査者個人の〈理解力〉と〈記憶力〉に委ねられていたわけである。私にとっては最初の社会調査であったので、渾身の力を込めて、報告書という形式にまで仕上げた。そこまで行なう必要もなかったわけであるし、誰からも要請されていなくてもよかったが、苦勞の末、大学院に入学したばかりの修士課程一年目の私にとっては、「何かをしたかった」ときでもあり、幸運なことに奨学金も得ていた私にはそれだけ自由な時間が本当に溢れていたのだ。

### 講座による社会調査

先述の記念すべき最初の社会調査は、私一人だけで行なわれたものであった。年が暮れる頃、講座の本来の「御家芸」とも言える講座全員による社会調査が行なわれた。<sup>(9)</sup>北海道内のいくつもの地域で一緒に寝泊まりしながら行なう、かつての伝統的な農村調査のようなスタイルである。具体的に述べれば、サンプリングで抽出された被調査者となる方の自宅に直接訪問して、対面式で直にお話をうかがう面接調査である。自由にお話をうかがうわけではなく、講座の中で共同制作された調査票に基づいて質問を行なっていくのである。この体験によって、記念すべき私のはじめての調査が

なりイレギュラーであったことを知った。講座の調査は、基本的に二人一組のチームで行なうのである。<sup>(10)</sup>ご自宅にうかがうことになるので、安全上の配慮もあるであろうか。その後、私も二人一組のチームによる行動が主であった。はじめての講座による泊まり込みの社会調査では、まるで遠足に行つた子どものようにワクワクしたことを覚えている。しかし、一日に三人もの生活史をうかがうことになつたりすると、かなりぐったりしてしまつた。夜はヘトヘトになりながらも、後輩たちと一緒にお酒を飲みながら語り合うことが本当に楽しかつた。なぜ生きるのか、なぜ大学に進学したのか、何のために働くのかなどといった青臭いことを議論し合つた。<sup>(11)</sup>調査に行つているのか、酒を飲みに来たのか、もはやわからないといった人ももしかすると少なからずいたのかもしれない。<sup>(12)</sup>そのようなある種の伝統的な農村調査方式とも呼べるような社会調査を体験することによつて、私にはいくつかの疑問が生じてきた。倫理的な問題をこの場で語ろうというのではない。それは方法論に関する疑問であつた。

本章の最初で述べたはじめての社会調査から、私はいくつもの社会調査を体験してきた。博士課程の頃には、玉野氏が述べているように、講座の社会調査の設営から運営までを任せられるようになった(玉野二〇〇三)。先生方や先輩方から指示されて動いていたときにはまったく見えてはいなかつた膨大な「すべきこと」が目前に迫つてきて、さらには何とか実際に行なうようになっていた。だが、予算と実際の支出等の講座の会計には一度も携わつたことがない。一大学院生であつたので当然のことであろう。調査の企画が固まり、期間も具体的に決められると、関係諸機関にご挨拶と協力の依頼に行くことにもなる。たとえば当該地域が選挙活動の真つ只中の場合、講座の社会調査自体が選挙の道具にされてしまうということもなくなるので、種々の注意が必要であろう。<sup>(13)</sup>その地域でもっとも安い宿泊施設の部屋を調査メンバーの人数分借り上げ、社会調査に備えるという仕事も忘れてはならない。すでにこのときには、在籍していた講座の方法論に対する自らの疑問は明確になり、講座の調査と自らの研究は切り離して考えていた。

なぜ私は、ここまで社会調査に疑問を感じるようになったのだろうか。想起すると、いくつかの象徴的な場面が浮かび上がってくるように感じる。当該講座を母体とした研究グループのメンバーとして、私も報告書作成に携わらせてい



ただいた小樽市の高齢者調査を思い起こしながら述べていきたい。<sup>(14)</sup>

この調査の「対象者」となった方々は、調査当時に小樽市のある地区に居住していた一九一七（大正六）年一月から一九二七（昭和二）年一月まで生まれ男性一三名、女性一九名の計三二名であつた。<sup>(15)</sup>

これらの「対象者」の方々のご自宅に調査への協力依頼状を郵送したうえで、お邪魔させていただき、講座で共同制作された調査票に基づき、大まかな生活史をうかがうこととなつた。生活史と言つても、中野卓氏が推奨しているような自由な聞き書きではない（中野二〇〇三）。あくまでも調査票に基づいた対面式の聞き取り調査であつた。とは言へ、結果的には「対象者」たちの生活史が構成されていくように配慮がなされていたように思われる。

「対象者」のご自宅に実際に訪問させていただき、お邪魔させていただく。北海道内の家宅はだいたいが二重サツシになつている。冬季においては、本州のような一重の窓では零下の冷たいすさまじい風が屋内に入りこんでしまい、暖房もあまり役立たないこともあるほどだ。しかし、改築されぬままの木造の古い小さな建物では一重の窓のままである場合もあつた。私たちがお邪魔させていただいたお宅の中には、二月の極寒期にはさぞ「しばれる」のではないかと思えるお宅も少なくはなかつた。

あるお宅では、調査者の私たちを「よく来てくださった」と欲待してくださった。腰が90度近くも曲がつたままの姿勢で、私たちをコーヒーでもてなしてくださいました。

ひびが入つた、茶渋が張り付いたコップにインスタントコーヒー。

少し冷めたコーヒーの味はいまだに忘れられない。視力が落ちてしまつた目では、コップのひびもこびり付いた茶渋も気付くことは難しいかもしれない。コップが欠けていることを指摘してくれる客人も訪れることはあまりないということも聞き取り調査の中で私は知つた。長時間の調査が終わつた。若い頃の話、青春時代の恋愛のこと。語りながら、「対象者」の敏が深く刻まれた顔が、柔らかくなつていくように感じられた。「話を聞いてくれて、ありがとう。」というお宅を後にする際のことばに對して、私は涙を我慢して、おもてなしへの御礼のことばすら言えなかつた。

感傷的な文章をいくつも書くことができる。社会調査は（出会い）の場でもある。しかも、その出会いは大都市の地下街ですれ違ふような、相手の顔も定かではないような出会いではない。調査者が被調査者を見据え、地下街などでは一人ひとりが意識して閉ざしている防壁に対して、調査者が真正面からこじ開けよう、あるいは開くのを一生懸命に手助けしようとするような特殊な出会いである。だから、いくつものフィクションよりもはるかに心が揺さぶられる出来事や語りが噴き出し、呼び込まれ、呼び起こされるのかもしれない。

このときの調査については、報告書の中で、私はこう記述していた。

「調査のスタイルは、被調査者の自宅において、二人一組となった調査者が講座内部において共同で作成された調査票に基づきながら質問を行なうという一回限りの面接型である。調査者の生年は一九六八・七〇年に集中しており、被調査者とは孫ほどの年齢の開きがある。すべての調査者が被調査者たちが語る言葉にリアリティを感じられたと言い難い。」

このように書かざるを得なかった。当時の状況を改めて想起してみたい。

被調査者となった高齢者のお宅に、私は学部生とともにうかがった。調査依頼の手紙はすでに送っている。電話等によつて、ご協力いただけるかどうかはすでに確認済みである。約束の日時にうかがう。被調査者となる高齢者の方にこ挨拶し、再び調査の主旨説明をさせていただく。その上で、調査票に従つて、聞き取り調査が行なわれた。

私、そして一緒にチームとなった学部生が、被調査者に質問を重ねる。前述のように、小型テーブルコーダーを用いてはいなかった。私たちは一生懸命メモをとった。高齢者の語ることは一言も聞き逃すまいと必死だった。時折方言も混じることばはその場で一瞬で理解することはたやすくはなかった。ある学部生は、相槌を打ちながら、高齢者が語ったことばを繰り返し口にし、再度確認していた。その際に語られたことばに、私は違和感を覚えた。その学部生が語ることばは、高齢者の方が語られた内容とは異なるものだったからだ。私はその場で、私の理解と著しく異なる場合のみ、もう一度確認してみた。当時の私が高齢者が語られることばをどのくらい理解していたか心許ない。しかし、

その学部生は明らかに誤解していたように思われる。なぜ、そのようなことが起こるのか。その学部生は、自らが体験してきたこれまでの体験と経験によって生成された世界観によって、高齢者のことはを解釈していたように思われるのだ。<sup>17</sup>あまりにも歴史的な実り豊かな語りを、現代日本社会における均一的で同質な世界観に無理矢理押し込み、至め、そして「加工」してしまっていたように思える。また、私たちは「調査票への回答」であるその語りを必死にメモにとっていた。調査者が回答を記入する「他計式」の調査である（直井一九九八）。調査を終えた後、私たちは場所を変えて、その走り書きのメモを一心不乱に消書きし、お互いの書いたものを付き合わせてみた。その際にも、私たちが書いた双方は、かなり異なるものだった。その学部生が「調査票への回答」というかたちをとって浮かび上がらせた高齢者の生活史という物語は、私がほんやりと描いた生活史という物語とは異なっていたのだ。私には、その学部生の物語がいびつで平板なものに見えた。小樽という地域社会の文脈からは乖離しているように思えた。ここでふと思う。私の解釈は正しいのだろうか。その学部生と私のどちらのほうが「正しい調査結果」なのだろうか。それを一体、誰が決めるのか。その被調査者となった高齢者に一度も会ったことのない講座の教員だろうか。それとも、現場にいた私たちだろうか。しかも、異なる解釈をしている私たちのうちのどちらであろうか。私は当時、大学院生であり、小樽の郷土史やいくつかの統計資料を読み込んでいた。だから、私だというのか。講座の中の権力関係で決まってしまうものなのか。知識の多さで決まっているものなのか。現場での一瞬の判断や感覚は尊重されることはないのか。私にはわからない。ただ、何年間もの間、チームを組んで調査を行っていたのだが、解釈が一致する場合はかりではなかったように思える。その際には、焦点を当てられることはなかったかもしれないが、このような解釈のせめぎ合いがたしかに生じていたのだ。その膨大なせめぎ合いの結果が、一人の高齢者の調査票として、講座に持ち寄りながら、総体としての調査結果としてまとめ上げられたと言えるだろう。<sup>18</sup>これこそ、まさにボトムアップ方式なのかもしれない（ボトムアップ式の研究方法に関しては、佐藤二〇〇四）。

少し疑問を感じることもある。この場合の社会調査の主体は誰なのだろうか。「講座」というヒエラルヒー（Hearth、

Chie) においては、講座の長こそが社会調査の主体であり、ひいてはそれにまつわる解釈の主体であると言えるかもしれない。だが、きわめて民主的な共同研究の場では、一体どうなるのであろうか(宮内二〇〇〇)<sup>(19)</sup>。

### 社会調査からフィールドワークへ

時が経ち、講座における調査票を用いた対面式面接調査には、小型カセットテープレコーダーが導入され、私は講座の後輩たちに社会調査のやり方などを指導する側にまわっていた。その当時、実際の調査場面において私は、講座の調査票の順番通りに質問をしてはいなかった。調査票の設問すべてを暗記し、被調査者となった方が少しでも苦にならぬように、スムーズな会話を行なうかのように、相手の方に合わせて、臨機応変に調査を進めていた<sup>(20)</sup>。ここに至るまで、私はさまざまな方の社会調査に一緒に努めてきた。まるで「圧迫面接」と思えるような重苦しい調査をされる方もおられた。また、被調査者となった方がおっしゃった語りを、自らの研究枠組のジャーゴン(専門用語)で言い換えて、戸惑われている被調査者に同意を求め、最終的に刊行された論文や報告書においては、あたかもその被調査者がそのことを語ったかのようになっているなどということも中にはあった<sup>(21)</sup>。調査者は多様だ。さまざまな調査者が多様な調査を行なっている。被調査者も同じように多様だ。そして、多種多様な調査場面の雰囲気によって、私たちは何らかの影響を受けてしまう。このような中で、私は被調査者となった方に心的な負担を極力かけないようにすることを心掛けた。社会調査という枠組は、時間のみに限っても、被調査者となった方の時間を消費してしまうものである。その代償として、よく見られるような大学の名前入りの手ぬぐいやボールペンを差し上げるといった行為は再考すべきかもしれない。逆に、そのような文字通りの「粗品」をやめて、改めて御礼状を送ったり、粗品のための費用を「対象者向けの報告書」作成の費用に回す方がよいという意見もある(玉野一九九八)。もはや研究者側が考えている被調査者となった方々の調査場面において消費されたと見なされる時間や労力と、実際のそれとは等価ではない。その乖離は著しいものになってきた／いるのではないか。だからこそ、日本社会学会のみならず、さまざまな場で問題視されている

のではないだろうか。私は、可能な限り、被調査者となった方の事情に合わせるかたちで、講座の社会調査というプロジェクトに参加してきた。繰り返し述べると、具体的には、調査票の設問すべてを暗記し、被調査者となった方との会話を不自然に中断しないように気をつけながら、調査を行なったのだ。このことは私のオリジナルであると声高に主張しようという気は一切ない。恐らく、私が知らぬだけで、このように調査を行なってきた方はごまんとおられることだろう。私としては、現在のフィールドワークにおいても、講座の調査票の設問すべてを組み替えながら尋ねることは少なくはない。さらに、以前のように小型カセットテープレコーダーを用いずに社会調査を行なってきた際に身に付いたと思われる、調査場面での語りを受けとめる力はいままお非常に役に立っているように思える。アルコールが入っても調査を続けることができるのは、農村での社会調査などでも培われたものなのかもしれない。私の現在のフィールドワークは、出身講座における社会調査の体験で育まれたと言えるだろう。

さて、このように調査票の順番通りに尋ねることをしない私のやり方に、読者の方はどのように思われたのであろうか。まったく話にならないと呆れられたかもしれない。現時点で、私自身もどちらが良いのかについては、いまだに結論は出てはいない。つまり、調査票の決められた順番通りに質問を行なうべきなのか、順番自体はさほど問題ではないのかという問題についてである。本書において繰り返し述べられている通り、私は臨床心理学講座出身で、心理学と社会学のはざまに陥ってしまったようなところがある。そのような少し変わった（雑種）の立場からすれば、厳密な実験室内実験とこの問題を重ね合わせて見てしまう。条件を制御するということに重きを置くとすると、私が行なってきた聞き取り調査は結果からすべて除外されるべきなのかもしれない。手続きにしたがっていないと見なされてしまうことだろう。しかし、一方では、講座による社会調査すべての条件を制御するというきわめて困難な課題も迫り来ることだろう。

私としては、これは立場の違いであると考えたい。「どちらが良い・悪い」という二項対立の単純な図式でとらえるのではなく、両者が長所と短所をともしに備えた、社会調査における立場であると考えるのである。ここにはまず一つの

立場がある。これを「調査票中心主義」と名付けよう。日本国の社会調査の流れに途切れることなく脈々と引き継がれてきた立場であろう。私が先ほどから述べてきた独自の方法は、この「調査票中心主義」の立場ではない。調査票は単なる道具と割り切つてしまい、調査票はあくまでも従と位置付ける、いわば非「調査票中心主義」の立場と言えるだろう。しかし、誤解を避けたいが、私は調査票を否定しているわけでは決してない。社会学の講座を果立った私はその後、調査票を用いて研究を行なうときもある。たしかに全面的に用いているわけではないが、状況がつかめない場合には、調査票を用いた量的調査を行なうこともある。何を尋ねられるのか、相手が非常に不安に感じている場合には、先に調査票というかたちにして見ていただく場合もある。いつどのような場合に調査票を用いるかということとは、かなり臨機応変であり、文脈に依拠するので、一般的な記述はここではかなり難しい。

最後に、私が調査票を中心に社会調査を行なうこと自体に疑問を感じた出来事を記述したい。本書の「はじめに」で引用したフィールドノーツの後日の出来事である。つまり、先の「はじめに」で引用した出来事の数日後に、これから引用する出来事がある。

(前略) 午後6時。皆はお開きになったが、Aさんに残つてもらつて、僕の書き直したものを見てもらった。同時に僕のやりたいことを聞いてもらった。彼女は僕の最後の結論部分を見たかたらしかった。結局、また僕がどういふ話にするのか見えないと言われ、また「白紙に戻して」と言われた。彼女は今日は時間がないから、自分の言いたいことだけ言うから、今度は僕が言う番をつくると言つた。彼女は今までのことをなかつたことにしてもらえないだろうか、と言つ。生活史の話は僕にとっては重要だけれども、彼女にとっては何ら重要ではないと言つた。僕が書いた生活史を読んだ彼女は、非常に困つた顔をして、もっと時間をかけてゆつくりすべきだと何度も繰り返した。それは、事実の細かい間違いが元ではないと言つ。根本的に僕は在日につい

てわかってはいないと言うのだ。彼女はこういうエピソードを話した。手が不自由な人にどういふふうに接すればいいのか、最初はわからない。しかし、一緒にいることによつて、その人が汗を拭くときにはテーブルの上ハンカチを置いて、自分の顔をそこにつけて拭くのだということがわかる。そうすると、汗をかいていると、テーブルの上にハンカチを広げて置いてあげれば助かるのだということが見えてくる。しかし、僕にはそういう点が何も見えていないと彼女は話す。(中略)いろいろな思いがあつて、そこに至つた、その経緯を僕はまったく理解していない、そこが彼女が白紙に戻したいところなのだと思つた。それに在日一般を理解するための一人として彼女は自分が話を聞かれたと考へていたのでと言つた。だから、僕がまとめたように個人の生活史としてまとめられることに、まず驚いたよつた。そして、非常にそれを嫌がつた。僕は自分なりに説明したが、わかつてもらつたとは到底思えない。僕には在日について何もわかつていないと言葉にショックを受けた。その通りかもしれない。このまま、研究を続けていくことに疑問さえ感じ始めた。

1993年11月27日(土) 12:30-18:30 (記述は翌日11月28日)

心理的な動揺が隠せない。フィールドノーツを読み返す度に、その日の心情がよみがえるような気がする。このエピソードは、私の研究そのものにかんがりの影響を与えているように思える。誰かを理解するということ。このことを、私は修士課程時のフィールドワークの中で、Aさんから学んだように思う。Aさんのことには、調査を行なう側の都合で相手を「研究対象」として位置付けた際に、その相手を理解する方法として、私たちはどうすべきかということに関して、数多くの重要なことが込められているように思う。

## おわりに

本章では、きわめて個人的な三つのエピソードを記した。

まず、私が何も知らぬままに行なった「はじめでの社会調査」を振り返りながら、その戸惑いをできる限り丹念に書き記した。ここには、社会調査の実際の場面においては、高度な調査論にまつわる知識ではなく、目の前にいる人に対する私たちの態度がまずは問われているということが示されているように思う。ここでは社会調査論という視点からの枠組ではなく、現代社会における日常的な相互作用という枠組がまず基本となっていることを忘れてはならないだろう。調査という体験を経るにしたがって、そのような意識が薄らぐ危険性もあるので、自戒の念も込めて記しておきたい。

次に、当時在籍していた講座による社会調査を振り返りながら、そのときの社会調査に対する違和感を想起した。単純にまとめるならば、被調査者の語りと調査者側の理解との乖離であった。複数の調査者によって社会調査を行なっていたために、それがたまたま鮮明になつたように思われる。そこから導き出された問題は、「解釈の主体は誰か」という問題である。講座というヒエラルヒーでは、その長が種々の責任を伴いながら、その任を務めるという結論が導き出されるかもしれないが、平等を謳った共同研究においてはいかなる解決手段が考えられるのだろうか。私の経験を述べているに過ぎないので、このことは対面式の面接調査に限られている。郵送調査や留め置き調査においては、このような問題に直面せずにすむだろう。とは言え、同種の問題が存在しないということとは異なる。

最後に、講座による社会調査から、現在私が行なっているようなフィールドワークに移行するにあたり、決して忘れることができないう出来事を記した。私の反応はあまりにもナイーブすぎるのかもしれない。私はいまもお、Aさんの主張が間違っているとは思えない。誰かが息づく生活の場に、外部の人間がその場の文脈を無視して、外部の文脈を何のためらいもなく持ち込みながら、上がり込んでくることを、Aさんは成めていたのではないだろうか。土足でずかずかと上がり込み、強引に話を聞き出そうとする態度に失望したのではないだろうか。私はそこから「聞き取る」のではなく、より添いながら見ることの重要性を再認識したように思う。この出来事後、聞き取り調査などには一生かか



わからないという生き方もあったかもしれない。しかし、結局、私はその方向には進まなかつた。いまでも、さまざまな方の話をうかがい、今もなお論文とかたちで活字にし続けている。

そのような私は、社会調査を否定してはいない。本章ではひとつの提案を行なつた。本章では批判を行なつたように見えるかもしれないが、このプロセスにおいて、社会調査における立場の相違が浮かび上がってきたように思う。その一つの立場は「調査票中心主義」である。このような立場の呼称を私は提唱した。ただ私は、調査票を用いる社会調査を行なう場合もあるが、対面式の面接調査を基本としており、調査票を中心には置かない、非「調査票中心主義」の立場ということになるだろう。そのように考えれば、本章は、「調査票中心主義」調査の素人が、「調査票中心主義」調査を体験的に学習し、非「調査票中心主義」の立場へと、その足場を移していったプロセスを綴つたひとつの物語と言えるだろう。

### [注]

(1) 二つのシンポジウムの詳細は以下の通り。

シンポジウム1「社会学の中の社会調査」(司会：中河伸俊・佐藤郁哉／1「社会調査をめぐる社会学の深刻な課題—大阪府下44市町村の市民意識調査実態を踏まえて」大谷信介／2「計量的モノグラフ」吉川徹／3「フィールドワークの再創造」松田泰二／4「社会調査ハンドブック」の方法史的解説」佐藤健二／討論者：馬場靖雄・赤川学)

シンポジウム2「社会の中の社会調査」(司会：櫻井厚・片岡栄美／1「サーベイ調査(Social Survey)の困難と社会学者の課題」玉野和志／2「二次的データ分析の問題と展望」山口一男／3「市民調査という可能性」宮内泰介／4「啓蒙主義以降」の調査の可能性を探る」山田富秋／5「暴力被害と調査研究」内藤和美)

(2) 現在の日本の高等教育機関には二種類ある。学会大会への参加を認める機関と、認めない機関である。

(3) 「社会学評論」の特集においては、桜井論文がその二つのシンポジウムで出された問題についての見取り図を示してくれている(桜井二〇〇三)。とりわけ、社会調査における認識枠組の問題と、調査者と被調査者との関係にはらまれるポリティクスと倫理をめぐる問題に焦点が当てられている。

(4) 社会調査の教科書においては、「対象者宅の探し方、対象者に対する『あいさつ』のしかた、面接調査のしかた（とくに個別面接調査の場合、これが重要）、調査不能や調査拒否の場合のあつかい方、調査終了後にその場で行う調査票の自己チェックのポイント、回収後の調査票のあつかい方」（江上・九九八、一一二頁）などもインスタレーションにおいて注意することが指示されているが、私が在籍していた講座においては上記のような話は一切なかったように記憶している。つまり、どのような調査主体によって、誰が実際に社会調査を行なうかによって、そして調査の実際的手法によって、この部分はかなり幅があると見なした方がいいだろう。

(5) 暴走族を対象にした伝説的なフィールドワーク（佐藤一九八四）で知られる佐藤郁哉氏によるフィールドワークの教科書からは、その当時のフィールドワークにおける服装に対して、佐藤氏が非常に戦略的に考えていた様子がうかがえる（佐藤二〇〇二、四六―四八頁）。つまり、「その場の雰囲気からあまり浮いた様子に見られないように」、「服装としてはジーンズにTシャツ、その上にはサファリスーツ」を羽織り、首からは一眼レフのカメラを下げていたという。これは、佐藤氏自身が当時のフィールドにいた人たちに理解してもらいやすいように、「『ジャーナリスト』に近い格好をすることにした」のである。このように、フィールドワークにおけるファッションは、フィールドワーカー自身がフィールドにおける人たちのことをその時点でどのように理解し、そのような人たちにどのように理解してもらいたいのかということの反映でもある。不思議なことに、男性のフィールドワーカーでこのような描写を取り入れる人は少なく、女性のフィールドワーカーではさらに少ないように感じる。

(6) 話している間に、不快感を和らげることは可能である。先のような議論はきわめて断面的とも言える。人間は一瞬の判断で好悪をたしかに決めていくかもしれないが、その好悪を逆転させることもまた不可能ではない。

(7) 大学院の小講座制で良かったと思われる点の一つは、このように講座で取り組んでいた調査に關して、気軽に情報交換が直にできるという点である。研究室でお茶を飲みながら、あるいは学内外の安価な食堂・定食屋で食事を取りながらやり取りされた情報が、実際の調査場面やその後の分析作業において非常に役立つことが多かった。大学院時代には、指導教員とのやり取りも重要であろうが、先輩や後輩との議論の方が有益である場合もあるだろう。

(8) だからといって、看護師に対しては、看護師というポジションの者もしくはそのポジションを経た者のみが調査を行なうべきだというわけではない。小宮論文を参照してほしい（小宮二〇〇〇）。

(9) 私たちの講座は、外部の他者に社会調査を委ねることはなかった。講座のメンバーによって大半の調査は進められた。当

該組織の外部の他者に委ねられた場合には、つまり、その社会調査に縁もゆかりもなく、意味を見出せない人たちに実際に調査そのものを任せてしまう場合には、社会調査の主体は当然のごとくりスクを負うことだろう。「調査会社にアルバイトとして雇われているらしい人たちが、ファミリーレストランで堂々と調査票の回答を捏造」するといったことも報告されている（森岡一九九八、vii頁）

(10) 「心理学・倫理ガイドブック」においては、面接法では一人の面接協力者に対して複数の面接者というパターンは、「圧迫感を与えるということから避けるべき」と考えられる」と指示されている（古澤ほか二〇〇〇、四八頁）

(11) 社会調査の結果報告の中に、調査を行なった学生たちが心情を綴った「調査日誌」を収録している場合もある（奥田・田嶋一九九五）。私自身も池袋調査のプロセスを知る上で非常に参考になった。さらに、青年期の自己論を研究する研究者にとっても示唆に富む記述ではないだろうか。私たちの講座の調査に参加していた当時の学生の一人は、「学生がいろいろな世代、世界の人と接することでカルチャーショック（当時はそれが面白かった）を受ける」と、「自分に欠けているものを認識する（今から思うと、これは大きかった。学生は社会人と比べてマナーはなっていない。今思い出しても恥ずかしくなることがたくさんある）」ことが、社会調査を体験する上で重要な意味であったと私に語ってくれた。

(12) 飲酒行為を嫌悪される方には信じられないことだろうが、農村調査においては一通りの聞き取り調査が終わり、酒を勧められてから本場の調査が始まるなどとインフォーマルな場では語られてきた。酒を飲んで酔ってから、被調査者の口からは「本音」が語られるというのだ（さらに、非合法の密造酒が振る舞われるかどうかも重要な指標となるとされていた）。それゆえ、農村調査を中心とする講座では、アルコールが強い者しかメンバーになれないということもあったなどと伝え聞いたりもした。現在ならば、調査者と被調査者との飲酒行為を倫理的に問題にする方もおられるかもしれないし、アルコールに酔った状態の回答をどのように扱うのかという認識論的な問題として取り上げる方もおられるのかもしれない。

(13) 例えば、以下のようなエピソードもある。「ある地域の町内会長（県議会議員のキャリアをもつ）に調査協力を依頼したところ不在であったので副会長に協力をお願いした。住民生活調査のことである。国勢調査の調査員の経歴をもつ副会長は快く協力することを約してくれた。ところが後にこのことを聞いた会長は無断で調査をすることはけしからぬ」と。結局、この地域での住民生活調査をわれわれは断念した。当時、革新系の政党に属していた町内会長のこのような認識も今日の町内会長像の一面を描きだすための断片的データとして受けとめることができよう」（安原二〇〇〇、六一三―六一四頁）。

(14) この調査の結果は、講座の一人の学生の卒業論文としてまとめられた。実証研究を柱としていた講座では、当時においてはそのような流れが当たり前であった。ちなみに、その学生は被調査者の生活史や語りを目を潤ませ、泣きながら卒業論文を書き上げていた。一方で、このときの調査メンバーの中に、非常に高価な外国産車に乗って、高齢者のお宅をまわって調査を行なう学生がいた。調査後の酒の席では、その行為の是非を問う議論がなされた。「青臭い議論」だったかもしれない。だが、いま思い返すと、調査論としてはさまざまな要素を含んでいて、いくつもの考えるべき論点を提起している話題だと思う。その一つとして、「被調査者と生活世界を異質にする調査者は、その被調査者に対して聞き取り調査は可能か」という問題だ。具体的に言えば、可能であろう。ただ調査票に基づいて質問をしていけばいいのだから。しかし、その場での微妙なニュアンスや雰囲気などの理解は可能であろうか。意見は分かれることとなる。もし、先の問題について聞き取り調査は可能ではないということになってしまうと、「先進諸国」出身で生活する研究者による「後進国」出身で生活している人たちへの聞き取り調査も不可能ということになるかもしれない。

(15) ちなみに一九九三年一〇月の時点で、日本国内の総人口における65歳以上の人たちが占める割合は13・5%であり、北海道内では13・4%であった。この調査が行なわれた地区は、翌年五月では20・9%であった。さらに、この地区の高齢者の独居世帯と高齢者のみの世帯は、当該地区における全世帯の22・8%を占めており、高齢者が多い都市として各地方自治体の職員及び首長が視察に訪れることが少なくはない小樽市の中でも、もともと高い割合となっていた。

(16) この調査において調査者の役割を果たしたのは大学院生4名、大学生19名の計23名である。ちなみに、この報告書を担当するにあたり、私はこの社会調査の二年後にこのフィールドに行き、単身でフィールドワークを行ない、事実の確認を行なった。

(17) これは、この学生がまだ知識や生活体験が十分ではない大学生だからだとは決めつけることなどできない。研究者同士においても、解釈の相違をはらみながら、共同で社会調査を行なっている場合もある。例えば、宮本常一はある農村での人間関係総合調査に参加した際の出来事を報告している(宮本一九六九)。

(18) さらに言えば、前述の通り、調査者となる人間の「理解力」と「記憶力」が試される結果となっており、このような調査者一人ひとりにかなり委ねられたデータをもとにして調査結果を書くことになるのである。

(19) さらに付け加えれば、一人きりのフィールドワークだからと言っても安心できはしない。その上、会話の録音が許され、さらにはビデオカメラでの撮影が許されたとしても、本書の第四章で示されているように判断がつかなくなるような場合も